

●最優秀賞

戦争と平和を伝える子どもを育てる 総合学習「艦内誌『不朽』」

愛知県碧南市立大浜小学校 ^{かねこ}金子^こてる子

1 主題設定の理由

(1) 研究の動機

本校では、第二次世界大戦を生きた方々の体験談を聞く機会を設けるなど、特に「平和教育」といえる程の教育課程は持ち合わせていない。そのため自分に引き付けながら「戦争」や「平和」に思いを馳せることはない。戦後も70年を迎えた今となつては、語り得る世代は高齢であり、直接聞かせることは至難であつて、このようなアプローチから「戦争」や「平和」を考えさせようとする自体が成立し得なくなつてきている。一方、昨今の世界情勢を鑑みれば、子どもたちに「戦争」や「平和」を身近に捉えさせてもやりたい。

こうした折、昨年7月、学区の民家から戦時に撃沈された旧日本海軍の伊号第29潜水艦の乗員が文芸作品などを寄稿して編集した艦内誌「不朽」の創刊号が見つかった(資料1)。防衛省防衛研究所が評するところ「見た事がない、70年前の太平洋戦争末期の未解明資料として貴重」、関西大学米田文孝教授にも「時代の波に翻弄されながら強い精神力で任務にあたり、立派な文章を残した乗組員の思いを生かしてほしい」と言わせる程の希少な史料であつた。また、乗組員の一人は本校の卒業生でもあつた。

そこで、その艦内誌「不朽」を教師と子どもたちで共に復刻することを平和教育の一方法に



資料1 中日新聞 2014.8.12

することを企図し、本研究主題を設定、実践した。

(2) 児童の実態

本校児童会運営委員は劣化の激しい艦内誌「不朽」の保存活動に資料1のように関心を示した。しかし、5・6年生児童に戦争についてアンケートを取ると「戦争体験談を聞いたことがない」者が97%であり、その理由は「語れる人がいない」59%、「知る機会がない」27%、「戦

争には興味がない」17%、「日本で戦争があったことは知らない」14%である（資料2）。「戦争をどう思っているか」の問いには、「戦争はいやだ」「戦争はよくない」「戦争は自分と関係ない」と答えているところを見ると、一般論であり、他人事に感じているようである。「戦争はカッコいい」「戦闘飛行機に乗りたい」と年齢相応の反応ももちろんあった。

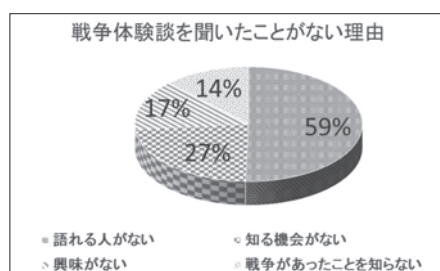
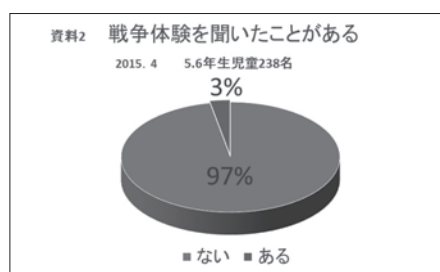
如上の実態下において、旧日本軍潜水艦乗組員一人ひとりの思いが著された艦内誌「不朽」を5・6年生全児童一人ひとりが分担して書き起こし、電子データ化する作業を通じて、行間までをも読み取らせながら学習を進めたいと考えた。

2 テーマに迫る基本的な考え方

(1) 目指す児童の姿

本研究では、研究主題に迫るため、次のように目指す児童の姿を設定した。

- 戦争や平和を自身に引き付けて考え伝えることのできる児童。
- 平和はどうしたら実現できるかを自分で考えることのできる児童。



資料2

(2) 研究の目標

- 戦争の実態や平和の重みを自覚し、進んで平和の大切さを伝えようとする姿勢を育てるための実践的な手立てを探る。
- 平和の実現に向けて学校と地域社会との連携のあり方を探る。

3 研究の仮説と手立て

(1) 研究の仮説

仮説1 艦内誌「不朽」が地域から発見されたことが児童の興味・関心を高め、身近なものとして戦争と平和を考えることができるであろう。

仮説2 総合的な学習で平和学習単元を設定し、計画的に学習を進めることで、戦争と平和についての認識を深めていくことができるだろう。

仮説3 伊号第29潜水艦乗組員の遺族を交えて戦争と平和について話し合う活動や発信の場を設定すれば、戦争と平和に関わる自分の意見を伝える力を育むことができるだろう。

(2) 研究の手立て

仮説1の手立て—伊号第29潜水艦の艦内誌「不朽」を教材として活用する

伊号第29潜水艦は旧日本海軍が建造し、1942年に完成。全長は100m、43年にはインドの独立運動家スバス・チャンドラ・ボースが来日のため乗り込んだこともあった。44年に欧州からドイツのジェットエンジン等の航空技術資料を持ち帰る途中、フィリピン沖で米潜水艦の魚雷攻撃を受けて撃沈され、106名の乗組員は1名を除き死亡している。その潜水艦の乗組員が、文芸作品などを寄せた艦内誌「不朽」の創刊号（B5版110ページのガリ版印刷物）の持ち主が、一部しかないにもかかわらず本校へ寄贈された（写真1）。劣化しており、破損、あるいは脱落しているページもあるが、全体的に保存状態は良く文字も比較的鮮明である。その史料価値は前述のとおり。これを単に展示しておくのではなく、教材として用いることにした。教材としての使用に堪え得るよう、全ページを写真に撮



写真1 艦内誌「不朽」

り、電子データ化した。

仮説2の手立て—艦内誌「不朽」の復刻活動を取り入れた学習単元の構築

「不朽」は旧漢字、旧仮名遣いで手書きで編まれている。ほとんど死語に近い熟語や言葉遣いもあれば、旧漢字と新漢字が同じ字体であっても、まだ習っていない漢字もある。それを書き起こすのは、児童にとっても教師にとっても意欲と根気が必要になる。しかも単語ではなく文章となれば、丁寧に調べ何回も読み通さなければ文意が通じない。そこで、分担して「不朽」を書き起こし、一人ひとりの作業を繋ぎ、艦内誌「不朽」を電子書籍として完成させることにした。こういう地道な作業を繰り返し繰り返し行うことで筆者の真意を読み込むことに繋がると考えた。

仮説3の手立て—艦内誌「不朽」復刻完成報告会の開催

児童たちの戦争と平和についての考えを発言し、発信していくために、潜水艦乗員の遺族を招聘し、艦内誌「不朽」復刻完成報告会を開催し、話し合う場を設定する。また、児童が自分たちの考えを新聞・テレビで報道していけるようにしていく。

(3) 単元構想

仮説と手立てに基づいて、学習単元を資料3のように作成した。

単元を「つかむ・深める・広げる」段階に分け、発達段階を考え、5・6年生で実践することにした。また、「不朽」プリントや「学びノート」を用いて課題を明確にし、乗組員の思いを考えながら授業を進めて行く。書き起し活動を効率よく進めるため、どのクラスにも教師5人以上を配置して人的環境を整えた。そうすることで、戦争を知らない児童も教師も共に学ぶことができると考えた。

(4) 抽出児童について

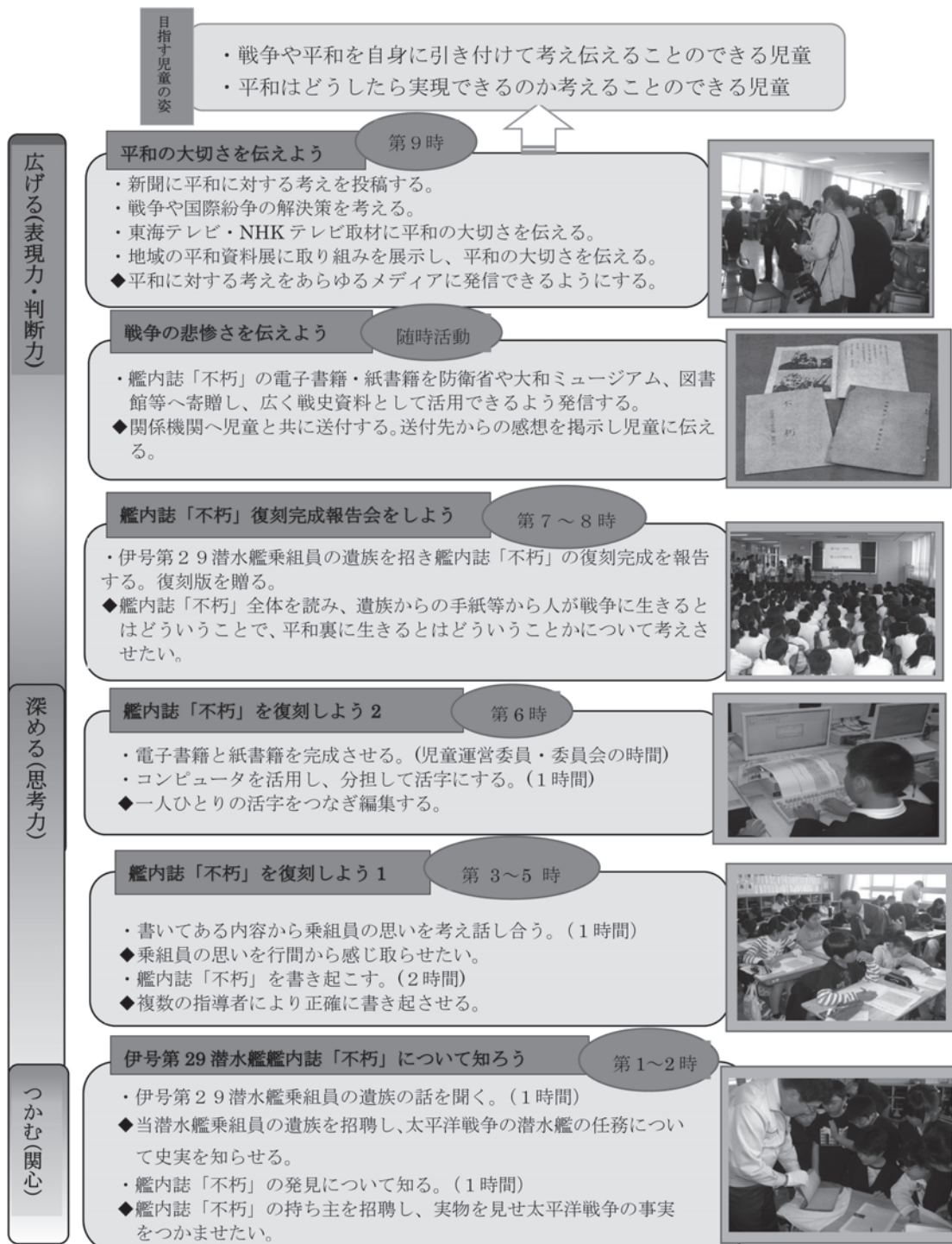
児童会運営委員長である児童Aは学校のリーダー的な存在である。事前アンケートでは、戦争体験談を聞いたことがなく、その理由に「戦争について知る機会がない」と答え、「戦争はいやだ」と考えている。そこで、児童Aに着目し、児童Aが「不朽」にどう向き合い、戦争と平和をどう考え、「目指す児童の姿」に近づくのか、その姿を追うことにした。

4 研究実践

(1) つかむ段階—伊号第29潜水艦艦内誌「不朽」について知ろう

昨年度、学区の民家から発見された「不朽」について全校朝礼で紹介をした。それを編集した軍人たちが乗っていた伊号第29潜水艦は戦争で撃沈され、乗組員は一人を残し、後の全員が戦死したこと、頂いた物は現存する唯一の現物であり、価値ある希少な史料であること、乗組員の一人に本校の卒業生がいたことを話した。

高学年の児童は興味をもち、私に実物を見せたい、どんなことが書かれているのか、なぜ大浜小学校にあるのかと尋ねてきた。昨年度の児童会運営委員が撮った写真データを見せ、痛みが激しいので多くの人に直接は読んでもらえないこと、手書きで謄写版刷りされていること、乗組員一人ひとりが書いた論文や手記、詩



資料3 総合学習 艦内誌「不朽」単元構想図(9時間完了)

歌などを編集し、潜水艦内で作成していたことなどを話すと、「ぼろぼろでよく残っていた」「戦争中で戦いながら、海底に潜った潜水艦の中でよく創れたね」「カラーすごいい」「撃沈場面の写真もある」「難しいたくさんの文が書かれている」と様々口にした。このことで、教材として取り上げても、児童と読み起こすことができるし、戦時を学ぶことができると実感できた。そこで、艦内誌「不朽」をだれでも読めるよう復刻する活動を提案した。今年度の児童会運営委員は自分たちが中心になって5・6年生児童全員で復刻活動を進めたいと話した。

4月に総合学習単元艦内誌「不朽」を立ち上げたところ、早速本校の取り組みが新聞・テレビニュースで伝わった。当時、同艦の魚雷や砲術指揮官の水雷長だった岡田文夫さんの妹の岡本さんから、親族4人で書き起こし活動に参加したいとの申し出があった。そこで、艦内誌「不朽」の持ち主杉浦さんにも加わっていただき、遺族の岡本さんを招聘し、伊号第29潜水艦乗組員について5・6年生全員で話をお聞きた。岡本さんは乗組員の写真2を見せながら、「兄は大阪出身で水雷長として同艦に乗船していたが、1944年7月26日に日本への帰路、フィリピン沖で米軍の魚雷攻撃にあって100人余りの乗組員と共に24歳で戦死した。兄によくかわいがられ、よく遊びに連れていってもらった。潜水艦の仕組みも教えてくれた兄の帰宅が楽しみだった」と70年前を振り返って話された（写真3）。

持ち主の杉浦さんは、「太平洋戦争で大活躍した潜水艦で、インドの独立活動家チャンドラ・ボースを乗せて日本へ亡命させた。米軍の潜水艦により撃沈され乗組員一人を除いて全員亡くなった。その手記です」と激戦で亡くなられた乗組員の遺物である事を話された（写真4）。

（2） 深める段階—艦内誌「不朽」を復刻しよう

書き起こし作業では、原文を読みやすくするために写像をA3版に拡大した。児童一人当た

り150文字程度であれば、分担し書き起こすことができるだろうと考え、110ページからなる「不朽」を写真5のように一人分ずつ「不朽」プリントにした。旧漢字・旧仮名遣いで難解な文章も多く、独特な言い回しが随所に見られる。写真6のように各クラスに5～6人の教師が書き起こし作業に加わり指導した。旧漢字・旧仮

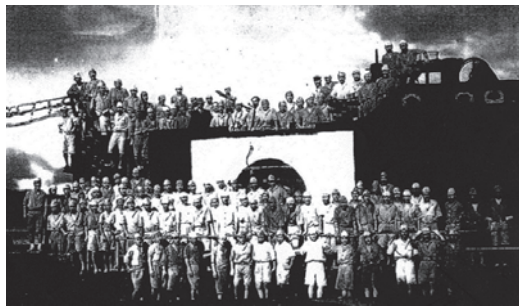


写真2 伊29潜乗組員



写真3 岡本さん夫妻



写真4 杉浦さんの説明

名遣い辞典や古文書辞典も活用しなければ読み取ることはできない。不鮮明で読めない文字は写真データを拡大して何度も読み返し、それでも読めない文字は×で記していくなど苦戦した。書き起し作業を終えて、児童Aは「……『恨みは重なる20年戦友の仇この時ぞ』というところから敵に強い恨みがあって長い間戦争だったことが分かった。他の人の文も読みたい」と、艦内誌に書かれている戦争の事実をもっと知りたいという感想を「不朽」プリントに記している(資料4)。児童Gのように「感動的な言葉や伊号29潜水艦の過こくさなどがとてもよく分かります。……12回も赤道を越えたことについても調べたいです」と、伊号第29潜水艦が金塊を運ぶ密命を受けていたことを調べてきた児童もいた(資料5)。

次に、自分の分担した文章の内容を伝え合う場を設けた(写真7)。資料6にあるように各自が読み起こした文から戦争の苦労や門外不出の密命を持っていたことも伝え合った。児童Aは、「印度洋作戦の歌 倉重上機関曹の詩で、印度洋作戦で敵の商艦を『我に必殺の魚雷あり』で撃沈した。この内容は艦内誌「不朽」にある写真の場面です」と史料を生き生きと捉え直した。それぞれが分担した150字余りであっても筆者の思いが強く込められており、明確によく伝わって来ることから、乗組員の執筆レベルの高さに児童のみならず教師も感動した。蛮勇を奮い起こして戦い、切実に死と向き合う思いに触れることとなった。

児童はパソコンが得意である。書き起こした150字余りをパソコンで活字にすることは容易である。手書き入力も可能なので旧漢字も難読漢字も入力できる。また、活字化することで、一字一句が自分の脳裏に書かれ、書き起こした内容がより鮮明になり、それに対する自分の考えを整理する手段になったと考える(写真8)。活字化することで、児童Aのように「とても悲しい気持ちになりました。平和であることはあたりまえと思っていたけれど、70年前の乗組員

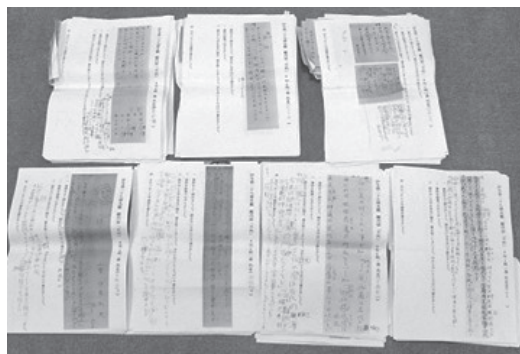


写真5 「不朽」プリント



写真6 書き起こし活動



写真7 伝え合う授業

三 読めない文字を先生に聞き、書き起こしましょう。分からないところは○で書きましょう。

我が艦は印度洋
見よ若人の血は躍る

赤道通過幾度か
仇船求め西東
財艦空母何ものか
我に必殺の免書あり

萬里の海原雲もなく
見ゆるは遠かうす煙
艦脚連の送づけは
嬉しや敵の輸送船

根母は重なる二十年
戦友の仇この時ぞ

四 分かったことや感想を書きましょう。

昔の字も形が似ているのもあったから意外に分かった。
この文は何が言いたいのか分らない。20年戦友の仇の時とどうも
ら敵に強い恨みがあて長い戦争だったことが分かった。他の人の文も
読みたいです。

資料4 児童Aの「不朽」プリント

三 読めない文字を先生に聞き、書き起こしましょう。分からないところは○で書きましょう。

入って優しい心さなけりやせい
たまには妻子の夢を見る
九つと世越えも越えたり十二回
赤道神のあきれ顔
十とせ止めをすすむりそれ越え
何で抱のめみよこの手綱

四 分かったことや感想を書きましょう。

感動的な言葉。伊号29潜水艦の過くさなことが
とても分かります。
思ひまは妻子の夢を見る。書いてあり感動的だと
がつらいとそれだけ戦争のために妻と別れること
十二回も赤道を越えたことについて調べたいです。

潜水艦の主な歴史
昭和17年2月竣工
連合国の船舶攻撃を
担った
昭和18年4月シン
ガポールに到着
10月艦底に火炎を
下ろし沈没
昭和19年3月バタビヤ
湾でバタビヤ海峡で沈没

池田

資料5 児童Gの「不朽」プリント

の人たちが命を捨てて日本や家族を守るために戦争したことを知って、今の平和がどんなにか大切か思うようになりました」と学びノートに記述し、学びを深めていった児童も多い。

そして「電子書籍になる実感がわいて楽しみです。多くの人に読んでもらいたい」と劣化した「不朽」を多くの人を読むことができるようになることに期待を膨らませた（資料7）。

各自が書き起こし、活字にした学習の成果を教師が繋げ一連に編集した。

それを元に児童会運営委員6人が校正し原稿を完成させた（写真9）。完成した原稿をPDFに変換し、タブレット端末で読める電子書籍に

していった。また、原稿を印刷所に依頼し、B5版105ページ、32,652文字の復刻版「不朽」500冊を製本した。

(3) 広げる段階—艦内誌「不朽」復刻完成報告会をしよう

愛知県下に住む伊号第29潜水艦乗組員の5遺族を招聘し、5・6年生児童238名と教師20名で艦内誌「不朽」復刻完成報告会を行った（写真10. 11. 12）。

「不朽」の実物は、紙の傷みが激しく、実物を手にして一人ずつの手でめくって読むと破損してしまうが、電子書籍であれば読みづらい文

T	この艦内誌「不朽」にはどんなことが書かれていたのか発表してください。
C1	『死線』には戦争でどのように死んでいくのか自分に問い、潜水艦の中で死ぬことといつも向き合って生活していた。
C2	潜水艦機械室内はいつも40度、生鮮食料は10日でなくなり、缶詰ばかりの生活、これを堪えて闘うのが潜水艦魂、とあり厳しい環境だった。
C3	鴻毛の軽きに比して一命を捨てねばならないとあるのは、当時は人の命は鳥の羽のように軽んじられていて自分の命を戦争で捨てた。信じられない。
C4	特別攻撃隊シドニー奇襲決行の日の前夜のやり取りが書かれていた。〇〇という記号が多くあって、機密のことも書かれていた。
児童A	印度洋作戦の歌 倉重上機関曹の詩で、印度洋作戦で敵の商艦を「我に必殺の魚雷あり」で撃沈した。この内容は艦内誌「不朽」にある場面の写真です。すごく生々しい。
C5	その続きは「受けよ正義のこの剣 大和男の贈り物とある。」勇気を自分で奮い起こしていた様子が分かる。

資料6 「伝え合う」授業記録



写真8 パソコンで活字化

『学びノート』 伊号29潜水艦艦内誌「不朽」	
タイトル : 「不朽」の内容をパソコンで活字にした感想	
5月13日(水)	6年()組(4)番 名前(○ ○ ○ ○)
1. 乗組員の気持ちや思いについて考え、パソコンで活字にした感想を書こう。	
とても悲しい気持ちになりました。平和であることはあたりまえと思っていたけれど、70年前の乗組員の人たちが命を捨てて日本や家族を守るために戦争したことを知って、今の平和がどんなに大切か思うようになりました。 電子書籍になる実感がわいて、完成するのが楽しみです。多くの人に読んでもらいたいと思います。	

資料7 児童Aの学びノート

を拡大したり、めくり返したり操作できる。児童Gが電子書籍を操作しながら「不朽」を読み進めると、「戦争中と今がつながった」と児童から一斉に喚声が上がった。「不朽」と名づけた理由「伊29潜の名にちなみ……不朽（ふきゅう）（29）と名づく」や、3ページに及ぶグラビア特集で10枚の写真も皆で見ることができる。艦長の念頭所感や論説「大東亜戦争の世界史的必然性」、乗組員の随筆や詩、和歌、俳句等の全容が詳らかになり学びは広がりを見せていった。『男の子等は召されて国の戦艦波騒がしき海の沈めに』と読み残した黒田弥五郎さんは、1944年同艦に乗り、25歳で亡くなった。その遺族である名古屋市在住の田辺さんは「父の写真もなく、顔も知らない。父の遺品は何一つない。この和歌が唯一残されていた。父の姿がまぶたに浮かぶようだ。小学校のみなさんに感謝します」と涙ながらに話した。また、兄を亡くした大府市在住の松波さんは、「戦後70年の節目に復刻版を作ってくれて感謝している。これからも平和な時代が続くよう努力してください」と呼びかけた。

—平和の大切さを伝えよう—

東海テレビが「ニュースOne」の10分間の特集制作で本校の取り組みを取り上げた。その中で、児童Aを中心として多くの児童が戦争や平和への自分の考えを伝えた(写真13)。ノンフィクション作家の藤井誠二さんには「戦の遺産である『不朽』には戦争賛美の文章が多い。子どもたちがその行間から戦争で死にたくない、戦争はおかしいといった考えを読み取っている学習……今後もこういった活動が重要」と高く評価していただいた。また、防衛省広報部からは「戦時中に制作していた艦内誌を電子書籍化した功績は、平和の尊さを伝える原動力といえる」とも評された。また、NHK番組「天使のアンゲル」制作にも平和への思いを伝え大いに貢献した。

遠く、北海道札幌をはじめ九州福岡にいらっしゃる乗組員遺族からの問い合わせが18件あり、



写真9 電子書籍化する児童A



写真10.11.12 「不朽」完成報告会



写真13 報道陣に意見を述べる児童

艦内誌「不朽」の復刻版と電子書籍データをお贈りできた。

また、艦内誌「不朽」の復刻版を希望する109件の方々にも寄贈することができた。大和ミュージアムをはじめとする関係機関・図書館からの問い合わせも殺到した。子どもたちと共に艦内誌「不朽」の復刻完成版を贈る活動はまだ続いている。

5 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

三つの研究仮説の検証を通して本実践の成果を述べる。

(ア) 仮説1の検証

地区から寄贈された「不朽」は稀有な戦争史料であることを全校児童に紹介したことで、児童の興味・関心を引き寄せることができた。それを教材としてどのように扱うかという点では、本実践では、書き起す活動を5・6年生全員で取り組むことにした。このことによって乗組員たちの思いが70年ぶりに甦り、児童や教師一人ひとりが戦争の苦労や切なさ、理不尽さを強烈な印象を伴って読み取ることができた。例えば、アンケートで「戦争は自分に関係ない」と答えていた児童Gは、書き起しの活動で「感動的な言葉や伊号29潜水艦の過酷さが分かります。……調べてみたいと思います」と戦争を自分事として感じている。艦内誌「不朽」が軍人自らの手で書かれ編集されており、しかも現存する唯一の一次史料であるだけに、子どもたちの戦

争と平和に関わる興味・関心を誘発する力を持っているのではなかろうか。それを教材として取り扱うことで、戦時を追究する興味や関心を一層高めることができたといえよう。

(イ) 仮説2の検証

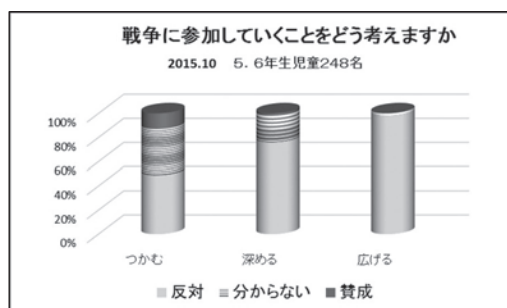
実践中に、各段階で日本が戦争に参加していくことの賛否をアンケート調査してきた。資料8のように、つかむ段階では反対48%、分からない39%、賛成13%である。深める段階では反対76%、分からない22%、賛成2%、単元終了後には98%が反対で、分からない2%になった。その理由に児童Aは「乗組員が長い間多くの苦労をして戦い海に沈んだ。戦争がどれだけ人を苦しめるのか。戦争のない平和な毎日がどれだけ大切で幸せか分かったから」と平和の大切さを深く捉えるに至っている。総合的な学習に平和学習単元を設定し、実践することで、戦争と平和についての認識を深めていくことができたといえよう。

(ウ) 仮説3の検証

艦内誌「不朽」との出会い、書き起こし活動、完成報告会に乗組員家族を招聘し、話し合いの場を設定した。学習後の児童の学びノートには、戦争の痛ましい思いが児童に伝わり、今現在の平和を継続していこうとする具体的な方法を乗組員遺族との話し合いから見出していることが分かる(資料9)。世界のあちこちで起こっている紛争にまで目を向け、積極的に平和を伝えていこうとしていることも窺える。

また、活動すべての内容を各新聞社・テレビ局が報道した。報道記事から分かるように平和への思いを多くの子が伝えることができた。伊号第29潜水艦乗組員遺族や日本中の「不朽」を手にした人々から「皆さんの活動するテレビを見ました。平和を伝えて続けてほしい」「皆さんの活動を応援する」とエールが送られている。

多くの新聞記事が語るように本実践は児童と共に艦内誌「不朽」の復刻活動を通して平和の大切さを考え伝える子どもが育ったといえる。



資料8

反対の理由 「学びノート」より

- ・潜水艦の授業が始まるまでは、戦争のことは全く知らなかった。自分の分担の艦内誌『不朽』には何が書いてあるのかよく分からなかった。でも、全部完成して読んでみると家族や日本のために死んでいって悲しいと感じた。命を大切にする平和が続くよう絶対反対する。
- ・敵艦撃沈とあったように戦争は殺人だ。そして、自分たちも撃沈され死んだ。戦争に参加すれば、日本は平和な国とはならない。殺人の繰り返しになる。
- ・「私の子ども達は赤道など何でもないないという世になるかも知れぬ」と書き残した乗組員がいた。平和を夢見ていたと思う。
- ・乗組員が長い間多くの苦勞をして戦い海に沈んだ。戦争がどれだけ人を苦しめるのか。戦争のない平和な毎日がどれだけ大切で幸せか分かったから。(児童A)
- ・自分の死を恐れず戦った勇気ある潜水艦の乗組員の人に感謝した。戦争は絶対してはならない。

(エ) 抽出児童Aの変容

戦争体験談を聞いたことがなく、その理由に「戦争について知る機会がない」と答えていた児童Aは、書き起こし活動ではもっと他の部分も読みたいと意欲的に取り組み始めた。電子書籍に変換したのも児童Aだった。テレビの取材では平和の大切さを堂々と話し、新聞記者にも自分たちが平和を実現していく覚悟を語っている。

(2) 今後の課題

声を発しない戦争遺産はまだ民家に多く眠っていると思われる。それらを掘り起こし、戦争を知らない教師が教材としてそれらの史料に込められている戦争の意味や平和の意義を子どもたちと共に根気よく明確にしていきたいと考えている。

本実践を通じて感じたことの第一は、今後、日本の平和を継続していくにはどうしていけばよいか児童と共に考え行動していく教育が必要とされているということである。

学 習 前		学 習 後	
		戦争に対する考え	平和を実現するにはどうしたらよいか
体験談を聞いたことがある	曾おじいさんが戦争で死んだという話を何回も聞く。戦争はよくない。	家族が戦争で死ぬことはとても悲しい。曾おじいさんはシベリアで捕虜になって死んだ。髪の毛だけが返ってきたそうだ。潜水艦の人々はまだ、海底だ。戦争は終わっていないと思う。	私たちが常に努力していく必要がある。世界の真実を知り、戦争をなくすのではなく、平和の作り方を考えるということを知ったことがある。自分で考え、平和を伝えていくことをしたい。
体験談を聞いたことがない	語れる人がいない戦争はよくない	大人になっても「不朽」を読み返し、戦争のことを忘れない。平和な日本を作っていきたい。戦争は二度と起こしてはいけない。	艦内誌を英語に訳して世界に伝えていく。小さい子どものころから戦争のことを学ぶ機会を増やす。平和について子ども同士が話し合う。
	児童A 知る機会がない戦争はいやだ	乗組員の遺族の方々と話して、70年前のことと思えなくなった。潜水艦の人たちのことを伝えていきたい。安全保障関連法案が成立すればまた、戦争みたいなことが起きる。	私たちの世代が戦争の悲惨さや平和の大切さを後世に伝えていかなければならない。マララさんの国のような紛争の勉強もして、どうしたら殺し合いがなくなるのか平和になるのか考える。
	興味がない自分に関係ない	遺族の人と話して自分のことのように悲しくなった。平和な日本を作っていくのに、自分にできることはないか考えるようになった。	僕たちが大人になって戦争に行きたくないという意思表示をすることだと思う。世界の国どうしが話し合ったり譲り合ったりしていくことが大事。
	日本で戦争があったことは知らない戦闘機に乗ってみたい	戦争中、毎日死ぬ覚悟で生きていた、潜水艦に乗っていたような人たちがいなかったら、日本はどうなっていたのだろう。命を捨てて家族や日本を守ろうとしていた。命は一人に一つしかない。	平和な日本を続けていくために、日本中の人に戦争のころのことをよく知ってもらうことが大切。「不朽」の電子書籍で一人でも多くの人に知ってもらおう。戦争をしない政治をする人を選挙で選ぶ。

資料9 学習後の戦争に対する考え

また、世界的には、生じて止まない国際紛争などについて、そこで生活している人々の痛みを感じ、その解決策を考え、実践していける児童を学校教育の中でどう育てていくのか、その方法論をさらに検討していく必要があると考える。

ただ、平和の実現に向けた地域社会と学校との連携の在り方という点においては、本実践では焦点を絞り込めず、方法論を探る手立てすら見出せなかった。先蹤の知識と知恵をお借りしたいと思っている。



毎日新聞
2015.4.28



中日新聞
2015.4.29



中日新聞
2015.7.15



中日新聞
2015.7.20



中日新聞
2015.7.27